

昭和の合併と平成の合併

昭和の大合併

和歌山県は1871（明治4）年の^{はいはん ちけん}廃藩置県で成立しましたが、和歌山県内のそれぞれの郡や市町村の名前や区画は、その後何度かの変更がありました。

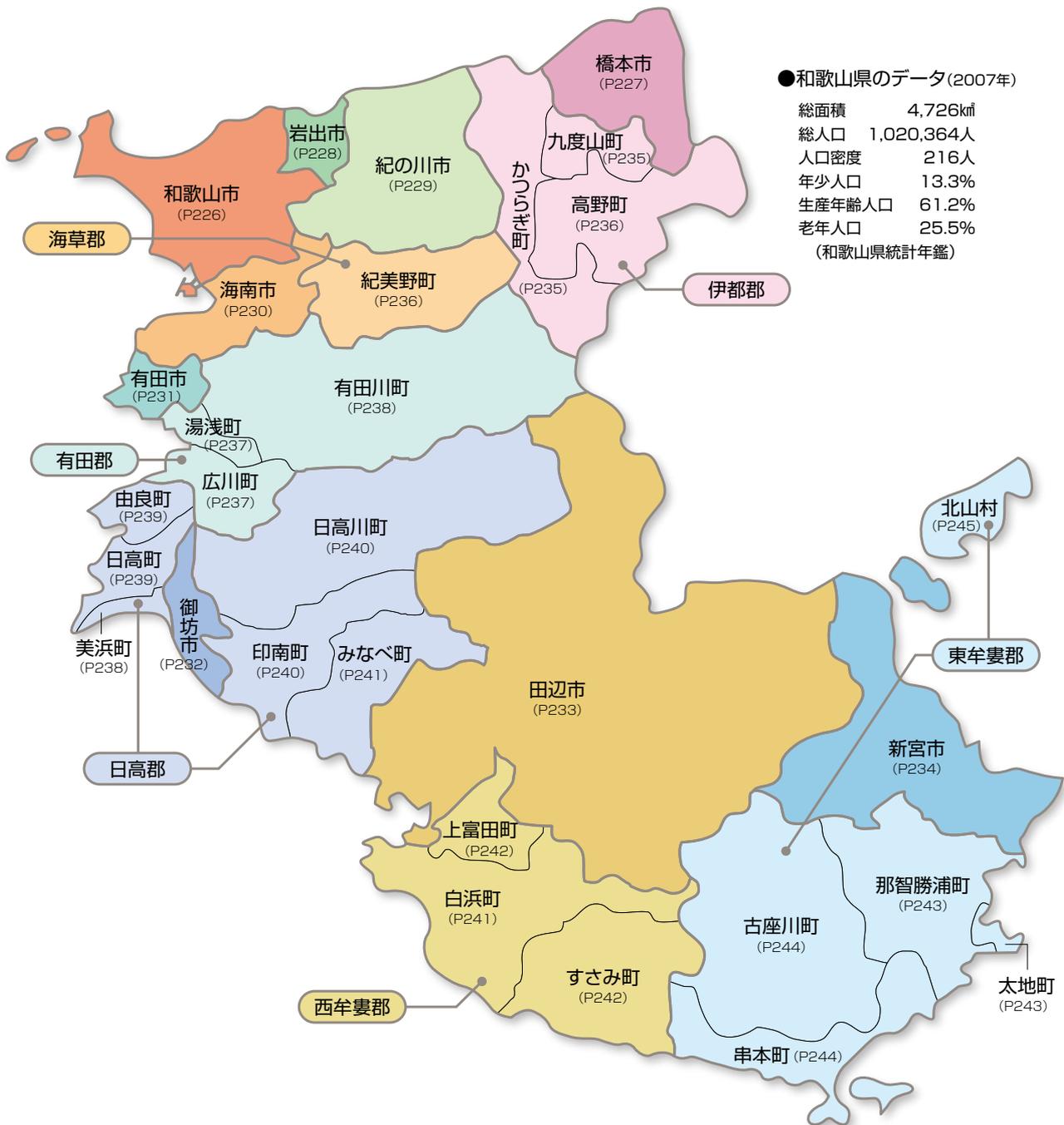
1888年に市町村の制度が生まれ、1956（昭和31）年の^{がつぱい}大合併ではそれまでたくさんあった町や村が合併して町になりました。

数年前まで使われていた市町村の名前や区画が下の地図です。



平成の大合併

昭和39年10月15日	(田辺市が旧牟婁町を編入) ~平成16年9月30日
平成16年10月1日	「みなべ町」誕生
平成17年4月1日	「海南市」・「串本町」誕生
平成17年5月1日	「田辺市」・「日高川町」誕生
平成17年10月1日	「新宮市」・「かつらぎ町」誕生
平成17年11月7日	「紀の川市」誕生
平成18年1月1日	「紀美野町」・「有田川町」誕生
平成18年3月1日	「橋本市」・「白浜町」誕生
平成18年4月1日	「岩出市」誕生(市制施行)



和歌山県の祭り・行事

公開時期		名称	公開場所	所在地	
1月	1日	藤白の獅子舞	藤白神社	海南市藤白	
	2日、3日	野中の獅子舞	継桜王子社 他	田辺市中辺路町野中	
	3日	下阿田木神社のお弓神事	下阿田木神社	日高川町皆瀬	
	第3日曜	天野の御田祭	丹生都比売神社	かつらぎ町上天野	
2月	6日	熊野御燈祭	神倉神社	新宮市新宮	
	10日、11日	大島水門祭	水門神社	串本町大島	
	11日(西暦偶数年)	杉野原の御田舞	雨錫寺阿弥陀堂	有田川町杉野原	
	11日(西暦奇数年)	久野原の御田	久野原岩倉神社	有田川町久野原	
	旧暦1月8日	粟生のおも講と堂徒式	吉祥寺薬師堂	有田川町粟生	
	旧暦1月8日に近い日曜 (西暦奇数年)	花園の御田舞	遍照寺 他	かつらぎ町花園梁瀬	
		六斎念仏(かつらぎ町)	延命寺	かつらぎ町下天野	
3月	10日	おとう祭	須佐神社	御坊市塩屋町	
		六斎念仏(かつらぎ町)	延命寺	かつらぎ町下天野	
4月	13日	湯登神事	熊野本宮大社 他	田辺市本宮町本宮	
	29日	上阿田木神社の春祭り(阿田木祭り)	上阿田木神社	日高川町初湯川	
5月	14日	糸我得生寺の来迎会式	得生寺	有田市糸我町中番	
6月	1日~9月第1土曜	有田川の鶉飼	有田川(有田市宮原)	有田市星尾	
7月	第1日曜	岡の獅子舞	田中神社	上富田町岡	
	7日~14日	妙法壇祇園太鼓	八坂神社	紀の川市桃山町段	
	13日、14日	那智の田楽	熊野那智大社	那智勝浦町那智山	
	13日	名喜里祇園祭の夜見世	大湊神社 名喜里町内	田辺市名喜里	
	14日	那智の火祭	熊野那智大社	那智勝浦町那智山	
	18日	顯國神社の三面獅子	顯國神社 他	湯浅町湯浅	
	24日、25日	河内祭の御舟行事	河内神社 他	串本町古座	
	24日、25日	田辺祭	鬮雞神社 他	田辺市湊	
	中旬	大窪の笠踊り	木村神社	海南市下津町大窪	
	下旬	横浜の獅子舞	宇佐八幡神社	由良町	
	最終土曜日	粉河祭	粉河産土神社 他	紀の川市粉河	
			有田川の鶉飼	有田川(有田市宮原)	有田市星尾
8月	12日	立神の雨乞踊り	立神社	海南市下津町引尾	
	13日~15日	大瀬の太鼓踊	吉祥院観音堂または公民館	田辺市本宮町大瀬	
	13日、14日、15日、23日	伏拝の盆踊	公民館	田辺市本宮町伏拝	
	13、14日	団七踊	西熊野神社	和歌山市西	
	14日	太地のくじら踊	太地漁港	太地町太地	
	14日、15日	お夏清十郎踊り	公民館	田辺市本宮町土河屋	
	14日、15日	平治川の長刀踊	本宮町山村開発センター野外ステージ	田辺市本宮町本宮	
	14日、15日	萩の餅搗踊		田辺市本宮町萩	
	14日、20日、23日	六斎念仏(みなべ町)	光明寺 他	みなべ町晩稻	
	15日	塩津のいな踊	蛭子神社前広場	海南市下津町塩津	
	15日	嵯峨谷の神踊り	若宮八幡神社	橋本市高野町嵯峨谷	
	15日	興国寺の燈籠焼	興国寺	由良町門前	
	15日	下川上の流れ施餓鬼	下川上公民館前の川原	田辺市下川上	
	16日	椎出の鬼舞	椎出巖嶋神社	九度山町椎出	
	お盆	權踊	熊野三所大神社	那智勝浦町浜の宮	
	講習会の最終日曜	岩倉流泳法	秋葉山プール	和歌山市	
			有田川の鶉飼	有田川(有田市宮原)	有田市星尾
			六斎念仏(かつらぎ町)	延命寺	かつらぎ町下天野

	公開時期	名 称	公開場所	所 在 地
9月	敬老の日の前々日	高芝の獅子舞	区民会館	那智勝浦町下里
	中旬	三輪崎の鯨踊	三輪崎漁港	新宮市三輪崎
	30日	広八幡神社の田楽	広八幡神社 他	広川町上中野
		有田川の鶉飼	有田川(有田市宮原)	有田市星尾
		六斎念仏(かつらぎ町)	延命寺	かつらぎ町下天野
10月	1日	広八幡神社の田楽	広八幡神社 他	広川町上中野
	1日	乙田の獅子舞	広八幡神社 他	広川町山本
	1日、2日	印南八幡の重箱獅子と祭		印南町印南
	4日、5日	戯瓢踊	(本祭)小竹八幡神社境内 (宵宮)西本願寺日高別院境内	御坊市
	5日	御坊下組の雀踊	小竹八幡神社境内	御坊市
	15日、16日	熊野速玉祭	熊野速玉大社 他	新宮市新宮
	15日	二川歌舞伎芝居「三番叟」	城山神社	有田川町二川
	18日	顯國神社の三面獅子	顯國神社 他	湯浅町湯浅
	連続する第1土曜日曜	阿尾のクエ祭	白髭神社	日高町阿尾
	第2土曜・日曜	隅田八幡神社の秋祭	隅田八幡神社	橋本市隅田町
	第2日曜	藤白の獅子舞	藤白神社	海南市藤白
	第2日曜	小引童子相撲	衣奈八幡神社お旅所	由良町衣奈
		神谷の稚子踊	衣奈八幡神社馬場	由良町衣奈
		衣奈祭の神事	衣奈八幡神社	由良町衣奈
	第2日曜	岩代の子踊り	東岩代・西岩代八幡神社	みなべ町西岩代
	体育の日	山路王子神社の獅子舞	山路王子神社	海南市下津町市坪
	体育の日	山路王子神社の奉納花相撲(泣き相撲)	山路王子神社	海南市下津町市坪
	10日	丹生祭	丹生神社 他	日高川町
	第3日曜	土生八幡神社のお頭神事	土生八幡神社 他	日高川町
	第3日曜	阿戸の獅子舞	宇佐八幡神社 他	由良町里
	横浜の獅子舞	宇佐八幡神社 他	由良町里	
13日過ぎの土曜・日曜	木ノ本の獅子舞	木本八幡宮 他	和歌山市木ノ本	
11月	1日	名之内の獅子舞	天寶神社	みなべ町清川
	2日、3日	芳養八幡神社の秋祭	芳養八幡神社 他	田辺市芳養
	3日	野中の獅子舞	継桜王子社 他	田辺市中辺路町野中
	3日	寒川祭	寒川神社 他	日高川町寒川
	3日	住吉踊	長野八幡神社	田辺市長野
	3日	上野の獅子舞	春日神社	田辺市下川下
	第1日曜日	太地のくじら踊	太地漁港	太地町太地
	14日、15日	堅田祭	八幡神社	白浜町堅田
	22日、23日	岡の獅子舞	八上神社 他	上富田町岡
		六斎念仏(かつらぎ町)	延命寺	かつらぎ町下天野
	花園の仏の舞	遍照寺	かつらぎ町花園	
12月	第1日曜	ねんねこ祭	木葉神社	串本町田原
	10日	御竈木神事	熊野本宮大社	田辺市本宮町本宮
	31日	たい松押し	下花園神社	かつらぎ町花園梁瀬
その他		紀州備長炭製炭技術	日高郡、田辺市、西牟婁郡、東牟婁郡	
		一ノ瀬大踊	農協環境改善センター	上富田町市ノ瀬
		熊野の田掻競牛	那智勝浦町、串本町、古座川町	
		野田原の廻り阿弥陀	野田原区	紀の川市桃山町野田原

和歌山県



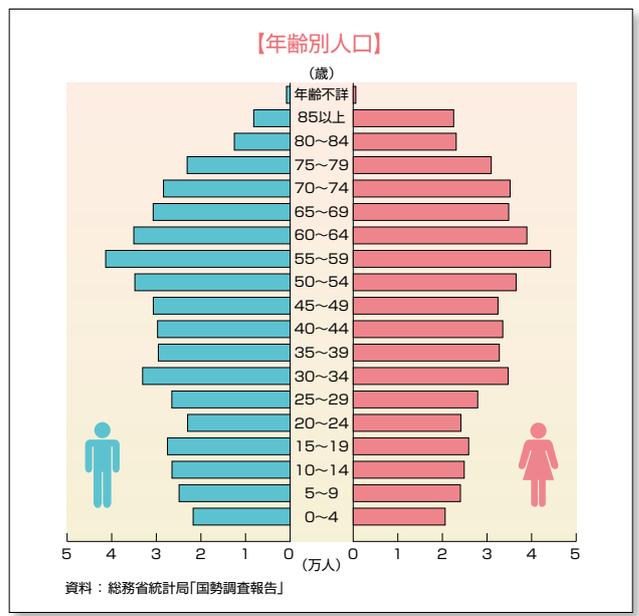
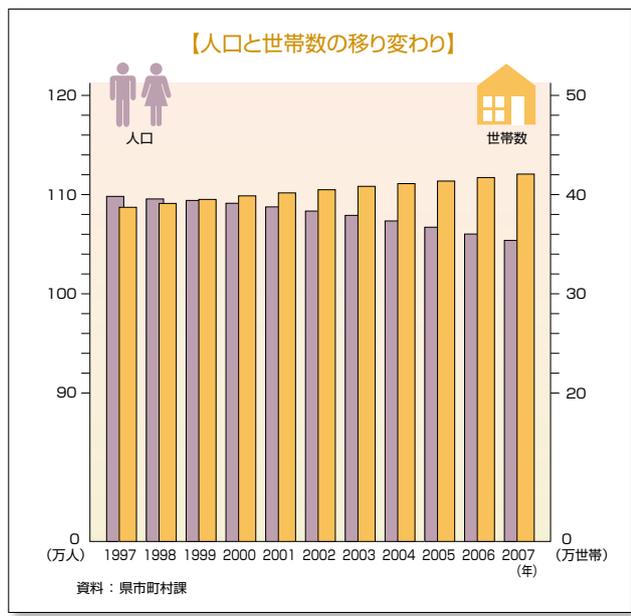
和歌山県庁

HPアドレス <http://www.pref.wakayama.lg.jp/>

県章の由来

和歌山県の頭文字「ワ」を簡潔に図案化したもので、県民の和を 象徴しています。末広がりしょうようの形は明日に向かって果てはしなく発展する南国紀州と、進取しんしゅの気性に富むゆたかな県民性を表しています。

和歌山県の人口

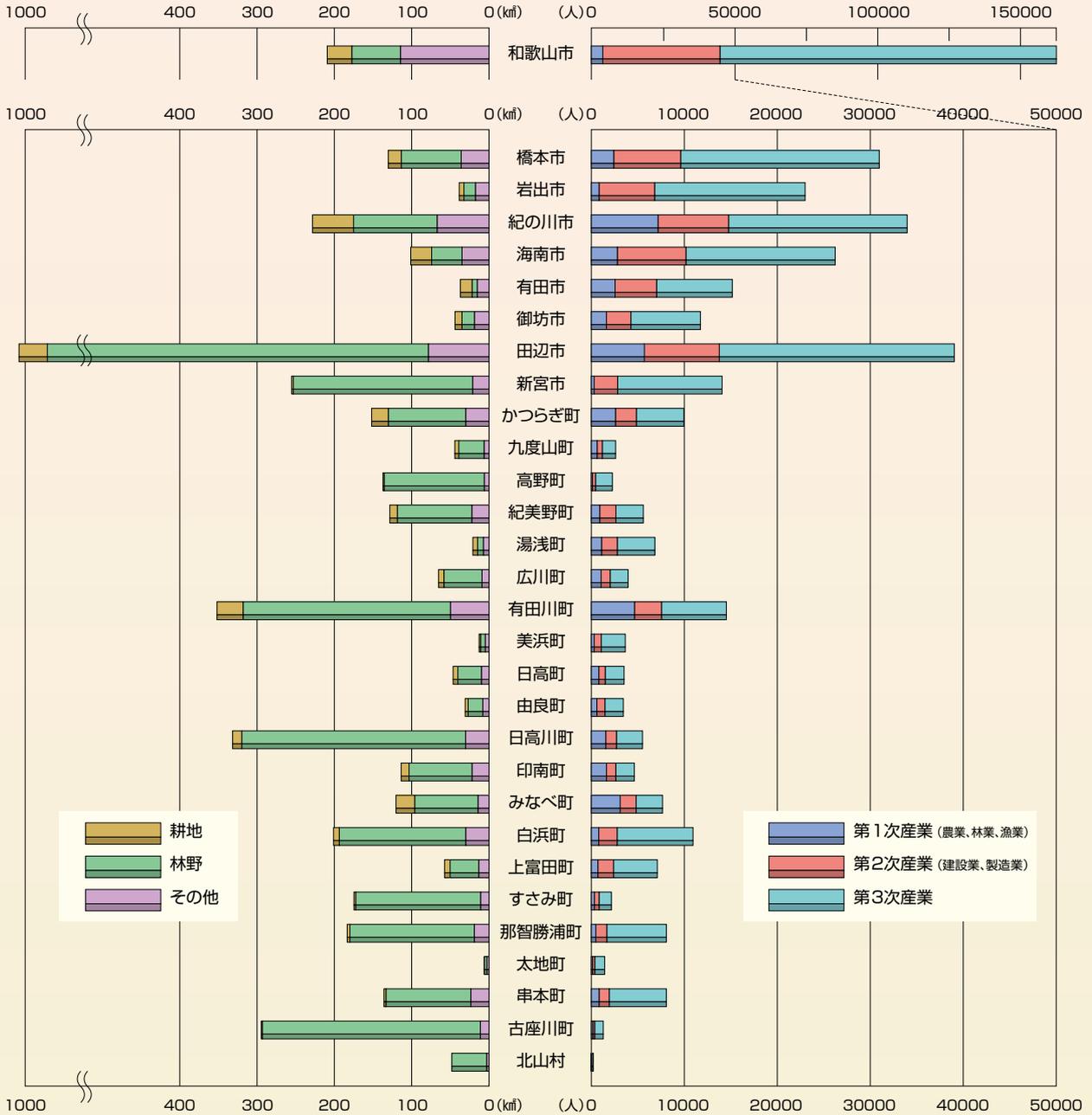


和歌山県のおもな山と川



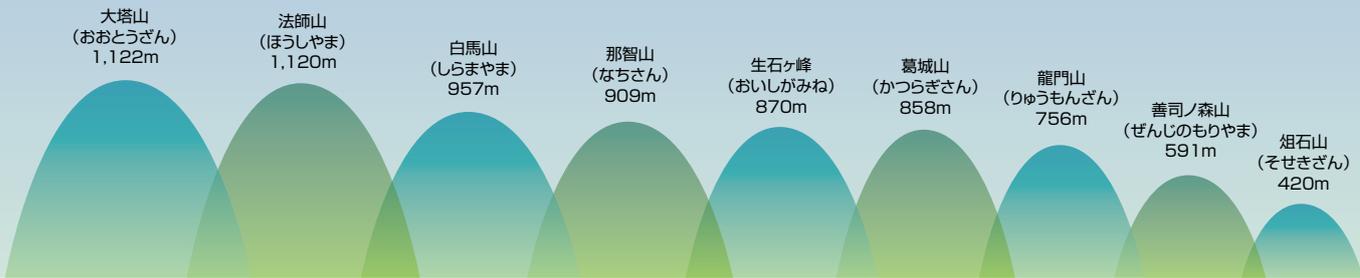
土地のようす

働く人のようす



※「土地のようす」は
 耕地面積 資料：近畿農政局和歌山農政事務所「和歌山農林水産統計年報」／時期：2006年7月15日、毎年
 林野面積 資料：農林水産省「2005年農林業センサス」／時期：2005年2月1日、5年毎／解説：林野面積＝森林面積＋草生地面積
 総面積 資料：国土地理院「全国市区町村別面積調」／時期：2006年10月1日

※「働く人のようす」は
 市町村、産業別15歳以上就業者数(2005年)
 資料：総務省統計局「国勢調査報告書」



資料：国土交通省国土地理院「日本の山岳標高一覧—1003山—」

わかやま 和歌山市



つつじ



くすのき

HPアドレス <http://www.city.wakayama.wakayama.jp/>

市名の由来

1585（天正13）年、豊臣秀吉の命を受けた豊臣秀長は、虎伏山にて城を築き始めました。その際、秀吉は山上から、古来万葉人の憧れの地であった「和歌浦」を臨み、和歌浦に相對する山に築くその城を「和歌山城」と命名したことに由来するといわれています。

以来、和歌山市は和歌山城の城下町として発展してきました。

市章の由来

和歌山市は、三方を山に囲まれ、西は紀伊水道を隔てて淡路島、四国を臨む風光明媚な温暖の地です。徽章は、その山に囲まれた地形を表し、白い矢印は三方の山を貫く市民の力、すなわち和歌山市発展の勢いを表しています。中の二重丸はワカヤマの「カ」（カタカナ文字）を図案化したもの。和は、和カヤマの「和」を表しています。

市の紹介

「水と緑と歴史のまち」和歌山市は、温暖な気候と美しい海や山や川の豊かな自然に恵まれ、先人たちが築き上げてきた文化や技術、産業、都市基盤などを受け継ぎ、紀州徳川家の城下町、また和歌山県の県都として発展してきました。

市のシンボルである和歌山城は、市の中心、虎伏山の深い緑に凛とした姿を映し、城内は四季折々の美しさにあふれ、市民の憩いの場として親しまれ愛されています。その天守閣は、一度戦災で焼失しましたが、戦後、市民の熱意で再建されました。2008（平成20）年には、再建50周年を祝う記念事業「城フェスタ2008」が市民・企業などの協賛・支援を得ながら盛大に開催されました。

また、城下町には、歴史的、文化的資源や景観、かつての名残を留める特徴的な町名などが数多く残っています。近年、この市の中心市街地に蓄積された文化遺産等を生かしたまちづくりが進められています。2007年には「和歌山市中心市街地活性化基本計画」が内閣総理大臣の認定を受け、行政が市民や企業、また大学など様々な主体と連携して中心市街地の活性化に向けた事業に取り組んでいるところです。

一方郊外には、国指定の史跡である大谷古墳、全国でも最大クラス古墳数を誇る岩橋千塚古墳群があり、学術的にも高い価値があることが知られています。

加太の淡嶋神社は、その古の遷宮が雛祭りの起こりであるといわれることから、毎年雛流しの神事が執り行われ、全国各地から多くの人々が集まります。



雑賀崎

市名の語源とも言われる和歌浦は、万葉のふるさととして名高く、現在も美しい景観をとどめています。とくに、雑賀崎の夕暮れは夕陽百選にもあげられる圧巻の美しさです。

この恵まれた自然や資源を生かしながら、和歌山市がより一層魅力ある都市として成熟していくためには、今後も行政と住民が互いに切磋琢磨し、住民自治を基本に、多様な主体の協働により地域の課題を解決していくことが大切です。

輝く未来に向け、和歌山市は、市民一人一人が誇りを持ち、生き生きと暮らせる安全な環境の確保と豊かな自然と魅力ある都市機能の実現をめざし進化を続けていきます。



和歌山城

はしもと 橋本市



さつき



もくせい、さくら

HPアドレス <http://www.city.hashimoto.wakayama.jp/>



紀の川祭

市名の由来

橋本市の歴史は古く、高野^{かいどう}街道と伊勢^{いせ}（大和）^{やまと}街道の交差する交通の要衝として栄え、高野山参詣者の宿場町、地方物産の集積地となり発展してきました。

橋本の名の起こりは、1587（天正15）年、高野山中興の傑僧・応其上人が母なる川・紀ノ川に橋をかけ、高野詣の便を図り、そこで塩市を始めたことによるものと言われています。この橋はその後すぐ流出しましたが、橋本の地名はこのことに由来し、現在まで受け継がれています。

市章の由来

橋本の頭文字「ハシ」を図案化し、紀ノ川に浮かぶ舟を表現して、市勢の躍進発展を翼状に市民の和を円形に象徴しています。

市の紹介

橋本市は和歌山県の北東端に位置し、市内中央部を母なる川「紀ノ川」が悠然と流れ、緑豊かな山々に囲まれた人口約7万人の田園都市です。2006（平成18）年3月1日に橋本市と高野口町との合併により新「橋本市」が誕生しました。

現在は、本市の将来を指し示す羅針盤として「橋本市長期総合計画」を策定し、市民にとって「このまちに住んでよかった」、本市を訪れた方々にとって「このまちに住んでみたい」と思ってもらえるまちづくりを積極的に進めています。

★橋本市の特産品

- ・紀州へら竿 120年の伝統を受け継ぐへら竿は、全国シェア90%を占め、和歌山県伝統工芸品の第1号にも指定されています。紀伊清水界隈はへら竿の里と呼ばれ、毎年隠谷池で、全国へらブナ釣り選手権大会が開催されます。
- ・パイル織物 パイル織物とは、織物の基布に毛が織り込まれている特殊な有毛布地です。高野口町で栄え、その製品は高級毛布からインテリア用品等あらゆる分野にわたり、世界各国で広く愛用されています。
- ・カキ・ブドウ 味・品質とともに日本一の折紙つきの富有柿や果肉がギッシリとつまんだブドウが自慢です。
- ・柿の葉ずし 熊野灘で獲れたさばを使った押し寿司に、柿の葉の香りがうつり、風味が豊かな柿の葉ずしは、昔から人々に親しまれています。
- ・橋本の玉子 県内生産量の過半数を占める県下随一の産地です。高品質でも知られ、新鮮な玉子を生かしたお菓子屋さんも多くあります。



橋本市全景

★主な年間行事・見どころ等

高野口公園・丸山公園桜まつり（4月）、子安地藏寺藤の花（5月頃）、杉尾古代米田植えイベント（5月）、全国へらブナ釣り選手権大会（6月）、玉川峡・根古川・東谷川のホタル（6月頃）、恋し野の里あじさい園（6月頃）、住吉祭（7月）、嵯峨谷の神踊り（8月）、紀の川祭（8月）、紀の国やっちゃん祭り（9月）、紀の川かっぱまつり（9月）、生ゴミたい肥活用コスモス畑（10月）、各地方秋祭り・高野口歩行者天国（10月）、各種文化祭（11月）、橋本市民菊花展（11月）、学文路・高野口ルミナリエ（12月頃）、名古屋蛭子祭り（1月）、橋本マラソン（2月）、橋本市公民館祭り（3月）、

いわで 岩出市



さくら



うぐいす



うばめがし

HPアドレス <http://www.city.iwade.lg.jp/>

市名の由来

岩出は、むかし「石手」と書きました。「石手」は、「巖出」のことで、紀ノ川の南北両岸に奇巖^{きがん}が突き出していたので、その名が起こったといわれています。1726(享保11)年藩^{きょうほう}の命により改めて「岩出」の文字を用いるようになりました。

市章の由来

岩出市の漢字の岩を図案化したものであり、図の円形は岩出市民の和と団結を意味し、両方のつばさは、市がどんと発展することを願って表したものです。

市の紹介

岩出市は、紀ノ川^ぞ沿いの豊かな穀倉^{こくそう}地帯にひらけたまちで、大阪府や和歌山市のベッドタウンとして人口増が著しく2006(平成18)年4月1日市制施行を果たしました。現在は、岩出市の有利な立地条件や豊かな自然、歴史・文化など恵まれた資源を生かし、新しい岩出市の創造に努めています。

岩出市には新義真言宗^{しんぎしんごんしゅう}総本山根来寺^{ねごろじ}があります。根来寺は、1130年、宗祖かくばん上人^{しゅうそ}が高野山^{しょうにん}に大傳法院^{だいでんぼう}と密巖院を創建したのが始まりと言われています。室町時代の末期の最盛期には、僧侶の住まい2,700余り、領地72万石を数え、根来衆と呼ばれる自衛のための僧兵1万余りをもつ勢力に発展しました。朱と漆^{うるし}がかもしだすコントラストが美術品として高い評価を受けている根来ぬりは、当時の山内で僧侶が食器類^{ぶつぐ}や仏具のぬり物を自分たちで作っていたものです。また、根来の子守唄^{うた}、根来鉄砲隊^{てつぽう}、根来寺能など伝統芸能も有名で、市民の手により保存継承活動^{けいしゅう}が続けられています。



岩出市立岩出図書館

また、根来寺の近くにある和歌山県植物緑花センターは、パノラマ花だんやわんぱく広場など様々な施設と四季の自然が楽しめるネイチャーランドなどがあり、家族連れでにぎわっています。

緑花センター北側の「根来山げんきの森」は、自然を見るだけでなく、様々な体験学習ができる森林公園で、公園内にある展望台からは岩出市を一望できます。



根来寺・大塔(国宝)

き かわ 紀の川市



もも



うぐいす



きんもくせい



HPアドレス <http://www.city.kinokawa.lg.jp/>

市名の由来

「昭和の大合併」^{がっぺい}によって、昭和30年～32年に村が統合されてできた、打田町・粉河町・那賀町・桃山町・貴志川町の5町は、約半世紀弱の期間、それぞれに発展の道歩んできました。

そして、これまでの地方自治体の枠内では解決し難い課題が増大し、本格的な地方分権の時代を迎え、2005（平成17）年11月7日、紀ノ川流域の、この5町が合併して「紀の川市」が誕生しました。新しい市の名前は公募により、命名しました。

市章の由来

「紀」の文字をシンボライズし、紀ノ川の流れや澄んだ空をイメージしたブルーを基調に、中心から交流の輪が広がる様子を描いています。

市の紹介

紀の川市は、和歌山県北部に位置し、北は大阪府、西は和歌山市・岩出市に接し、人々が生活するうえで利便性に富み、清流、紀ノ川がもたらす豊かな恵みと美しい自然環境、長い年月にわたって育まれてきた伝統ある歴史・文化をはじめ豊富な地域資源を有しています。また、人口約7万人を擁し、和歌山県で3番目の人口規模を誇るまちです。



桃源郷

紀の川市は、温暖な気候と肥沃な土壌を活かし、農業のまちとして多種多様な農作物が生産され、「あら川の桃」をはじめハッサク・イチヂク・カキなどの果樹栽培やシクラメン・スプレー菊などの花のハウス栽培が盛んで、特に都市緑化用の植木や苗木は、近畿一の生産量を誇っています。

このように、農業を基幹産業とする紀の川市では四季折々の旬の食べ物が豊富に生産され、日本一の売り上げを誇る「めっけもん広場」をはじめ市内各地に農産物直販所があります。また、学校給食への地場産品の積極的な活用など地産地消の推進とともに食育への取組みを進めています。

さらに、粉河寺や紀伊国分寺跡などの文化財や全身麻酔を施し乳がんの摘出手術に成功した「華岡青洲」や歌人西行の生誕地としての文化遺産も多いまちです。

先人が築いてくれた歴史・文化を尊び、新たな時代に対応した暮らしと文化の創造、活気に満ちたまちづくりを目指して旧5町の市民が和の心をもって結ばれ、「恵まれた自然と豊かな伝統が息づくふるさと紀の川市」づくりが始まっています。



スカイスポーツ

かいなん 海南市



HPアドレス <http://www.city.kainan.wakayama.jp/>

市名の由来

この地域は、1896（明治29）年に当時の ^{なぐさ}名草郡と ^{あま}海部郡が ^{がつべい}合併して生まれた海草郡の南部に位置したので、言葉を縮めて「海南」と呼ばれるようになりました。また、海南中学校が創立されたころ1922（大正11）年から、「海南」は新聞などでの慣用語となり、1934年（昭和9年）の市制施行の際、そのまま使用されました。

2005年（平成17年）の合併時には、全国公募によって新しい名称が検討されましたが、地理的なイメージを持ちやすいことや、歴史や伝統があり全国的にも ^{ちめいど}知名度が高いという理由などから、「海南市」に決定しました。

市章の由来

市章については、全国から1,509点の ^{おうぼ}応募があり、^{しんさ}審査の結果、現在の図案が採用されました。

2つの緑は海南市の豊かな自然と市民が共生・交流・協調する様子を、青は海を表し、^{めぐ}恵まれた環境の中で優しさや安らぎが輪となって、のびのびと広がってゆく「元気 ふれあい 安心のまち 海南」をイメージしています。

市の紹介

現在の海南市は、2005（平成17）年4月1日に海南市と下津町が合併して誕生しました。人口は約5万8千人（平成21年1月末現在）、面積は101.18平方キロメートル、和歌山県の北西部に位置し、北は和歌山市・紀の川市、東は紀美野町、南は ^{きみの}有田市・^{ありだ}有田川町に隣接し、西は紀伊水道に面しています。

年間平均気温が約16度と四季を通し温暖な気候に恵まれていることから、南部ではミカンやビワの栽培、北部ではモモの栽培が盛んです。特に本貯蔵ミカンやビワは下津町地区の名産品で、全国的にも知られています。また、紀伊水道を臨む沿岸部では、シラスやハモ、ワカメなどの海の幸にも恵まれています。

さらに、黒江地区周辺は日本四大漆器の一つである「紀州漆器」の産地としても知られ、経済産業大臣から ^{こうげいひん}伝統工芸品の指定を受けています。日用家庭用品（特に水まわり製品）の出荷も全国的に高いシェアを誇ります。

万葉の昔から和歌にも詠まれている名勝の地である海南は、いにしへの都人が訪れ詠んだ歌も多く、景色を愛で、恋する人を想う歌など14首が万葉歌碑として建っています。そして今も往時の面影を残す熊野古道が南北に通る、そこに9つの王子跡が点在して、当時の賑わいが偲べれます。王子とは熊野参詣の道中で遙拝したり、休息や宿泊したりした場所で、歌会などが開かれたこともあります。現在も、王子や藤白峠からの素晴らしい眺めや魅力ある見どころを訪れるハイカー達が多くいます。

加えて、下津町地区は文化財の宝庫といわれ、和歌山県下の国宝建造物7つのうち、国宝「長保寺本堂」「善福院釈迦堂」など、実に4つがあるほか、県史跡の「和歌山藩主徳川家墓所」など、文化財にも恵まれています。

現在の海南市には、阪和自動車道の3つのインターチェンジがあり、また、JRでは全ての特急くろしお号が海南駅に停車するようになるなど、大阪市内や関西国際空港へのアクセスが非常に良好となっています。新市でさらなる発展が期待されています。



JR海南駅



熊野古道

ありだ 有田市



みかんの花



椎の木

HPアドレス <http://www.city.arida.lg.jp/>



みかん畑

市名の由来

この地方の最初の呼び名として、「阿提^{あて}」と日本書紀に記録されています（689年）。「阿豆^{あて}」「足代^{あて}」などともありますが、その後「安諦郡^{あて}」となり、806（大同元）年に「在田^{ありた}」と改められたと『日本後紀^{こうき}』に記されています。これが、明治の時代までになるまでに「有田^{ありだ}」となり、現在に引き継がれています。

市章の由来

円形は特産物のみかんの果実を表し、2本の角枝は葉を示すとともに、有田市の将来の発展を^{しょうちやう}象徴しています。

市の紹介

有田市は、和歌山県の北西部、県庁の所在地である和歌山市から南へ約25kmのところ、有田川の^{かこう}河口近くに位置する人口約3万3千人、面積約37km²の海、山、川の自然に恵まれたところです。

霊峰高野山を源として紀伊水道に注ぐ有田川は、この地方の母なる川であり、歴史、文化など、互いに深い^{たが}かかわりを保ちながら発展してきました。気候は瀬戸内海気候区、南海気候区との接続地帯に当たり、紀伊水道に面しており、年平均気温は摂氏16℃と温暖です。年間平均降水量は1,600mm程度、積雪はまれです。

おもな産業は、農業、漁業、石油、その他^{じば}地場産業の蚊取り線香や作業用手袋^{てぶくろ}の製造などです。有田市へは阪和自動車道の海南IC、または有田ICで降りて、国道42号線で約20分、鉄道の場合は、JRきのくに線特急くろしおで、天王寺^{てんのうじ}駅から箕島^{みのしま}駅までは、約1時間です。

まちづくりの目標としては、いつまでも変わることのない基本理念に近づくために、3つの将来都市像をもち、実現を支える5本柱とするため、それぞれの分野に基本方針^{かか}を掲げています。

(基本理念)

「あなたとわたしがつくる美しい^{かいてき}快適なまち 有田」

(将来都市像)

1. 市民が主役になったまち
2. 自然・文化・歴史と産業^{ちやうわ}が調和した美しい豊かなまち
3. 人と人が活発に交流する楽しく快適なまち

(分野ごとの基本方針)

- ①安全で住み良い有田づくり
- ②美しく快適な有田づくり
- ③豊かで活力ある有田づくり
- ④有田をつくる人づくり
- ⑤有田を支える行政改革



有田川河口

ごぼう 御坊市



こぎく



ハマボウ



くろがねもち



HPアドレス <http://www.city.gobo.wakayama.jp/>



日高別院

市名の由来

「御坊市」は、1954（昭和29）年4月、御坊町・湯川村・藤田村・野口村・塩屋村・名田村の1町5村が合併して誕生しました。

1595（文禄4）年、それまではっきりとした地名もないような荒地に浄土真宗本願寺の坊舎「日高御坊」（現在の「日高別院」）が建立されました。

坊舎は、土地の人から「日高の御坊様」、「御坊所」と呼ばれ尊敬を集め、周辺には各地の特産物を扱う問屋などが軒を並べ大変栄えるようになりました。人々の信仰と繁栄の中で、いつしか地名も「御坊」となりました。

市章の由来

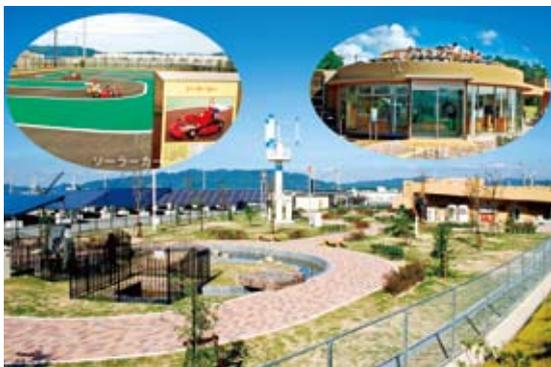
波型は「ごぼう」の頭文字を表し、水産業海運業の盛んなることを示し、▲型は木の国を表現して林産業の盛んなることを示しています。

市の紹介

御坊市は、和歌山県の海岸線のほぼ中央に位置し、市の北部には白馬山脈が、中央部には清流豊かな日高川が流れる「海・山・川」の自然に恵まれた地域です。日高川の河口付近では百数十種類の野鳥が飛来し、初夏にはハマボウの群生が鮮やかな黄色の花を咲かせます。さらに干潟は、シオマネキなどの希少生物の生息地で「日本の重要湿地500選」にも指定されています。

市内には、地名のおこりである日高別院をはじめ、歴史的に古くから人々が生活をしてきた足跡がいたるところに残されていて、日本最古の青銅製ヤリガンナの鋳型や多数の古墳が発見されています。また、長い黒髪が縁で奈良の都に上って文武天皇の妃となり、聖武天皇の御生母となった「宮子姫」の伝説も残されています。

御坊市は、昔から紀州材の集散・加工が盛んで、肥沃な平野では、米・麦・大豆・甘藷・綿などが生産され、江戸時代にはそれらを酒・醤油・酢・砂糖などに加工して「日高大廻船」で大坂、江戸へ運んでいました。明治時代末期から大正時代になると、製材所や紡績会社などの企業が次々と設立され、1931年には、御坊臨港鉄道（現：紀州鉄道）も営業を開始し、商工業が目ざましい発展を遂げ、日高地方の中心都市として発展してきました。また、農業・漁業も盛んで、特に農業においては県内でも有数の花き・野菜の産地となっており、スターチス・カスミソウ・スイートピーなどは全国屈指の出荷量を誇っています。



EEパーク

温暖な気候と自然環境に恵まれている御坊市では、オートキャンプ場や総合運動公園などの行楽・レクリエーション施設が整備されています。また、日高港内には太陽光・小型風力発電などの研究施設や展示などを行うPR施設、ソーラーカーコースなどを備えた公園施設を一体的に整備した、新エネルギー複合施設「日高港新エネルギーパーク」（愛称：EEパーク）があり、家族の憩いの場・子ども達の学習の場として利用されています。

たなべ 田辺市



梅



めじろ



うばめがし



HPアドレス <http://www.city.tanabe.lg.jp/>

市名の由来

2005（平成17）年、田辺市・^{りゅうじん}龍神村・^{なかへち}中辺路町・^{おおとう}大塔村・^{ほんぐう}本宮町の5市町村が合併する際に、一般公募の結果から新市の名称として名付けられました。

市章の由来

この市章は、1921（大正10）年図案を^{けんしやう}懸賞募集し、田辺町章として選定したものを合併前の田辺市が引き継いできたもので、中央部は、田辺の漢字の「田」（大正10年制定）を図案化し、^{かがや}輝く星座のごとく田辺市の将来のますます発展することを象徴しています。

市の紹介

田辺市は、5市町村が合併して、^{きんき}近畿で最も広い市域を有する新市としてスタートをきり、現在では県下第二の都市として、さらには、紀南の中核都市としての役割を担っています。

また、市域には、美しい海、山、川の大自然をはじめ、世界遺産に登録された「熊野古道」や「熊野本宮大社」に代表される古い歴史や文化、日本三美人の湯と知られる^{りゅうじん}龍神温泉や日本最古の湯といわれる「湯の峰温泉」などの温泉郷、人々の心と体を癒す豊かな自然環境や、^{たさい}多彩で魅力的な地域資源が数多くあります。



水呑王子

こうした歴史や文化、豊かな自然や地域の特性を大切にするとともに、それぞれの魅力を最大限に生かしながら、^{きんこう}調和と均衡のとれたまちづくりを進めています。

市民憲章

わたくしたち田辺市民は、美しい海・山・川の豊かなめぐみに感謝し、先人たちが築きあげた歴史と文化をうけつぎ、自治と福祉のこころにあふれたまちをつくるため、次のように市民憲章をさだめ、力を合わせてその実行につとめています。

- ・豊かな自然を大切にし、調和のとれた美しいまちをつくります。
- ・歴史と伝統に学び、教養を高め、文化のかおるまちをつくります。
- ・スポーツに親しみ、心身ともに健康で、希望にみちた楽しいまちをつくります。
- ・人権を守り、互いに助け合い、明るく平和なまちをつくります。
- ・時と資源を生かし、働くことを喜び、共に栄えるまちをつくります。



田辺湾に浮かぶ神島

しんぐう 新宮市



はまゆう、川さつき なぎの木、熊野杉、天台烏薬

HPアドレス <http://www.city.shingu.wakayama.jp/>

市名の由来

新宮とは、^{くまの}熊野速玉大社が^{せんざ}現社地に^{かみくら}遷座して、旧社地^{かみくら}神倉山に対して新宮殿を「新宮」といったからであろうと『熊野山略記』に記されています。

市章の由来

波と山をかたどっています。大きくうねり激しく岩をかむ波、高くそびえ^{いくえ}幾重にも^{つら}連なる山、この山の^{いだ}抱くところに新宮市があります。

「天うつ波と、とりよろう山に守られてここに平和の都市がある。繁栄の都市がある。」新宮市の^{きしゅう}徽章はこのようにささやき告げています。

市の紹介

新宮市は、和歌山県、^{なら}奈良県及び^{みえ}三重県の県境が接する紀伊半島の東南部に位置して太平洋に面し、温暖で^{こうしつたう}高湿多雨な気候風土により豊かな水資源と樹木育成に^{めぐ}恵まれた自然環境の中にあります。

歴史的に古くは、神武天皇東征のコースにあって、『日本書紀』などには熊野神邑（くまのかむのむら）とよばれ、熊野信仰の中心都市として栄えました。中世には、熊野参詣・熊野三大社のひとつ熊野速玉大社の門前町として発展しました。明治以降は、熊野材の生産地、製紙業や製材業で繁栄した歴史をもち、今日まで熊野地方の行政、経済、文化、教育の中心都市として発展してきました。

世界遺産に登録された「紀伊山地の霊場と参詣道」の熊野古道「大雲取越」「小雲取越」「高野坂」や川の参詣道「熊野川」、名勝「^{どろきょう}瀨峡」をはじめ、素晴らしい^{けいこく}渓谷や数多くの^{たき}滝など、熊野の海や山や川の織りなす豊かな大自然があります。文化面では、佐藤春夫や中上健次、東くめ、西村伊作などの多くの文化人を輩出しています。また、源平の合戦で有名な熊野水軍を今に伝える「御船まつり」や毎年2月6日に行われる熊野山伏の伝統をもつ「お燈まつり」、三輪崎の鯨踊り等、祭りや伝統芸能もさかに行われています。さらに、秦の始皇帝の命を受け不老不死の霊薬を求めて熊野に渡来した徐福伝説による中国や台湾との交流、米国カリフォルニア州サンタクルーズ市との姉妹都市交流など、多種多様な異文化との交流も活発に行われています。



佐藤春夫記念館

熊野文化と豊かな自然を活かし、「時代に調和する人を育み、自然と調和するまちづくり」を基本理念とし、地域の活性化を図るとともに、時代の潮流に対応した快適な都市づくりをめざし、古今東西の全ての人と文化が集い、交流し、賑わいをみせる、まち全体が華やいだ都市づくりに努めています。



高野坂

かつらぎ町



あじさい



きんもくせい

HPアドレス <http://www.town.katsuragi.wakayama.jp/>

町名の由来

かつらぎ町は、1953（昭和28）年の町村合併促進法の施行に伴い、当時の妙寺町、大谷村、笠田町、四郷村、見好村、天野村の6カ町村の間で合併のための協議が進められました。最終的には、1958年7月の合併によりかつらぎ町が誕生しました。町名は、和泉葛城山系の山麓に位置する場所にあることから、ひらがなで「かつらぎ町」と名づけられました。

また、平成17年10月に、かつらぎ町・花園村が合併し、新「かつらぎ町」が発足しました。

町章の由来

かつらぎ町のひらがなの「か」を図案化したもので、全体を平和と発展の精神にみため、円形は友情と団結、左右の翼状は永遠の発展と限りなき飛躍を象徴しています。

町の紹介

かつらぎ町は、和泉山麓・高野山麓の美しい自然に育まれたまちで、多くの社寺・史跡・名所などを有し文化財の宝庫といわれています。

特に「紀伊山地の霊場と参詣道」で世界遺産に登録されている丹生都比売神社・高野山町石道などの文化遺産、花園守口ふるさと村や花園グリーンパークなどの有田川流域にみられる自然滞在・体験型の観光施設、紀ノ川流域の万葉集に詠われた名所「妹山・背山」を中心とした景勝地、日本一の生産量を誇る四郷の串柿、四季折々で艶やかに色づく果樹などの豊富なフルーツが味わえる観光農園などがあります。



丹生都比売神社

くどやま 九度山町



ほたん



柿

HPアドレス <http://www.town.kudoyama.wakayama.jp/>

町名の由来

諸説ありますが、その一つに弘法大師が槇尾山の弁財天を信仰され、高野山をお開きになってからも月に九度ずつ槇尾山（遍照寺）へ参詣されたため、九度山の名が出たという説があります。

町章の由来

九と山の文字を図案化したもので、円形は円満と平和、山形は進歩と発展を表し、この二つの組み合わせが一致協同を意味しています。

町の紹介

九度山町は、緑豊かな自然と国宝や国指定重要文化財など数多くの歴史的文化遺産に恵まれています。特に慈尊院と丹生官省符神社、そこから続く町石道は、2004（平成16）年7月7日『紀伊山地の霊場と参詣道』として世界遺産にも登録され、多くの観光客が訪れています。また、戦国の智将、真田昌幸・幸村父子の隠棲の地としても有名で、5月4日・5日には真田まつりが催されます。

特産物として、日本一のおいしさを誇る『富有柿』があります。11月には大収穫祭も行われ、大勢の人で賑わいます。これからも、自然と歴史を大切に、文化と豊かな心の町として発展します。



慈尊院・多宝塔

こうや 高野町

しゃくなげ
石楠花こうやなぎ
高野槇

HPアドレス <http://www.town.koya.wakayama.jp/>

町名の由来

今からおよそ1200年前の高野山^{かいそう} 開創から明治初年まで寺領として管理され、明治11年高野山外の13大字で高野村を組織し、1889（明治22）年4月、町村制の施行により高野村となりました。1928（昭和3）年11月1日に町村制を施行して高野町となり、さらに1958年6月1日、町村合併促進法により富貴村と合併しました。

町章の由来

高野町の「高」を図案化し、「塔」（歴史）をかたどって、「太陽」（町制の発展）と「月」（平和と文化）をいただき限りなく繁栄する高野町を表したものです。

町の紹介

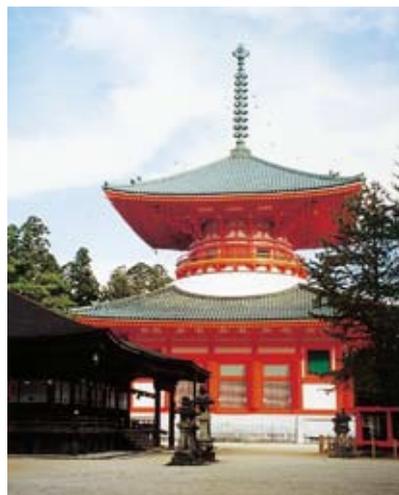
町の中心である高野山上は、町人口の約70%を占め、産業、文化、経済の中心地であり、またわが国有数の山岳仏都、観光の町として発展していますが、他の地区は過疎化状態にあります。

農林業の生活基盤の整備、道路網の整備改良、教育環境の改善など積極的に推進していますが、地理的悪条件はどうしようもなく、最大の課題となっています。

緑深き山々に包まれた高野町は、歴史の重みと文化の香りが宿る町です。

平成16年には文化遺産として、世界遺産に登録されました。

私たちは、先人の努力をうけつぎ、心のふるさと高野町をこよなく愛し、これからも希望に満ちた“世界にひらけゆく高野文化のまち”「宗教環境都市」として、安心と安らぎを共感できるまちづくりに取り組んでいます。

こいぼんだいとう
根本大塔

きみの 紀美野町



さくら



セグロセキセイ



カヤ（榎・栢）



HPアドレス <http://www.town.kimino.wakayama.jp/>

町名の由来

紀州（和歌山県）の「紀」と美里町の「美」と野上町の「野」を合わせた名称で、町民だけでなく、町外から訪れる人たちにも、「君の町」は「私の町」、「みんなの町」であり、ともにより良いまちづくりをめざそうとする想いと、美しい自然を守り、自分たちのふるさとであるという意識を持ってほしいと願いをこめました。

町章の由来

フレッシュ感あふれるブルーと、若葉をイメージしたグリーンは、紀美野町の美しい空と川、そして山の木々の緑を象徴しています。

円を基調とした滑らかなシルエットは、住民の調和による優しいふるさとの姿をイメージするとともに、未来へ向けた発展と飛躍への期待が込められています。

町の紹介

2006（平成18）年1月1日に野上町と美里町が合併して誕生した紀美野町は、中央を東から西に貴志川が流れ、南には長峰山系が連なり、ススキの大草原で壮大なパノラマが楽しめる県立自然公園「生石高原」、屈指の反射望遠鏡を誇る星の動物園「みさと天文台」などがある自然豊かな町です。

また、のかみふれあい公園をはじめ多様な交流が行える施設があり、心あたまる癒しの空間が充実しております。

十三神社、野上八幡宮など数多く古くからいわれのある文化財があります。かつてシュロを原料として栄えた製造業も時代の移り変わりと共に石油化学製品を原料とした製造業に変貌してきましたが、昔から培われてきた伝統産業を支援しながら、新産業を取り入れ、新たな付加価値を生む事業おこしの促進をしています。

山の斜面を利用して、柿、みかん、山椒づくりも盛んに行われています。

「空・山・川のふれあいのある美しいふるさと」を将来像とし、豊かな自然環境を大切に、次代に継承するため豊かな教育と文化づくり、安全・安心なまちづくり等に積極的に取り組んでいます。



のかみふれあい公園

ゆあさ 湯浅町



三宝柑



なぎ

HPアドレス <http://www.town.yuasa.wakayama.jp/>



大仙堀

町名の由来

湯浅に人が住み始めたのは、今から5000年ほど前のことです。当時は、海が今よりずっと中まで入り込み、水（ゆ）が浅く広がっていたことから「ゆあさ」の名がついたとも、古名「温笠（ゆかさ）」から転じたともいわれています。

町章の由来

湯浅の「ユ」の文字を図案化したものです。全体の形は太陽の昇る状態（日の出）を象徴し、躍進湯浅を表現しています。円は和を意味し、図案の中心にあります。末広及び上昇角の部分は急速な発展を表しています。

町の紹介

和歌山県の中部西岸に位置する湯浅町は、周りを海と山が取り囲む自然環境に恵まれた小都市です。まちの歴史は古く、平安時代末期から活躍した土豪「湯浅氏」の本拠地として栄え、熊野参詣の重要な宿所の役割も果たしてきました。古くから漁業や農業が盛んでしたが、陸運・海運の要衝であったことから、特に商工業を中心に発展を遂げてきました。とりわけ湯浅を特徴づけたのは、鎌倉時代に伝わった金山寺味噌の製造過程から生まれたといわれる醤油の醸造です。江戸時代に入ると紀州藩の保護を受けて隆盛し、湯浅醤油はまちの代表的な産業となりました。

16世紀末頃、熊野街道の西方に開かれた古い市街地には、今も醸造業関連の町家や土蔵など、近世から近代にかけての伝統的な建造物が数多く残り、江戸時代から続く老舗醸造元からは醤油の芳香が漂ってきます。湯浅独自の歴史や伝統を今に伝える町並みは、我が国にとって価値が高いと評価され、和歌山県では初めてとなる国の「重要伝統的建造物群保存地区」に選定されました。

湯浅町では「活力ある美しい町、誇れる町 ゆあさ」を目標に町民が主体となり、豊かな自然や特色ある歴史的景観を活かし、誇りと愛着を持てるまちづくりが進められています。

ひろがわ 広川町



ささゆり



あらかし

HPアドレス <http://www.town.hirogawa.wakayama.jp/>



稲むらの火の館

町名の由来

1955（昭和30）年4月1日、広町、南広村、津木村の1町2村が合併し、3町村を通じて流れる広川の名前をとって、町名を広川町に決定しました。

町章の由来

広川町の頭文字「ひ」を図案化したもので、図形は町民の和を意味し、明るく豊かで住みよい広川町を表現し、両翼は円形の部分つまり町民の和に支えられながら、明日に向かって果てしなく躍進し続けることを表したものです。

町の紹介

津波の被害から村や人々を守った世界的偉人「濱口梧陵」を生んだ町です。濱口梧陵は、戦前の尋常小学校第5学年用国語読本「稲むらの火」の主人公で、現在の耐久高等学校・耐久中学校の前身である耐久社の創始者でもあり、江戸時代末期から明治時代にかけて防災事業に身を捧げた人物です。安政の大地震津波時、稲むらに火を放ち、多くの村人を救った濱口梧陵の功績は、現代に通じる津波防災の象徴として広く語り継がれています。濱口梧陵の偉業と精神、教訓を学び受け継いでゆくため、2007（平成19）年4月、濱口梧陵記念館と津波防災教育センターから成る「稲むらの火の館」が誕生しました。

広川町は、海・山・川と三拍子そろった美しい自然環境に恵まれたまちです。そこで、町域全体を一つの公園とみなし、自然景観、歴史的景観に加え、町民が暮らす日常生活環境を整備し、町民が公園のような環境の中で、快適に生活できるまちづくりを進めます。「美しく快適な緑のまち・クリーン&グリーン広川」を基本理念とします。

- ①美しく快適な生活環境づくり
- ②安心して暮らせるまちづくり
- ③いきいきとした活力のあるまちづくり
- ④豊かな心と文化を育むまちづくり
- ⑤みんなの手によるまちづくり

ありだ がわ 有田川町



コスモス



ヤマガラ



みかん

HPアドレス <http://www.town.aridagawa.lg.jp/>



蘭島の棚田

町名の由来

2006（平成18）年1月1日（^{きび}吉備町・^{かなや}金屋町・^{しみず}清水町）の3町の合併にあたり、^{こうぼ}公募し投票により決定された名称です。

新町の中央を、有吉佐和子の小説「有田川」などで全国的にも知られた清流有田川が貫いており、この川の恵みを受け発展してきた歴史があり、これからもその恵みの川を大切にしていきたいと考えています。また、「有田」の標記によりみかん産地のブランドであることもイメージできるということで町名と決定しました。

町章の由来

ARIDAGAWAのAを^{ずあんか}図案化し、そこに緑豊かな山、清流の有田川とまちの自然を表現し、全体の円形は町民の和とまちのさらなる発展を表しています。

町の紹介

有田川町では、「有田川がつなぐ、人と自然、山とまち、交流が未来をつむぐ」をテーマに、合併後のまちづくりに取り組んでいます。町内には、人や自然、産業、伝統文化など、さまざまな「きらめき」を感じることができる魅力があり、これまで長い歴史が培ってきた地域の宝を活かしながら、安心して暮らせる「きらめき ひろがる 有田川町」を目指しています。

みはま 美浜町



ひまわり



松

HPアドレス <http://www.town.mihama.wakayama.jp>



煙樹ヶ浜

町名の由来

1954（昭和29）年10月1日に松原村・和田村・^{みお}三尾村の3村が合併して、美浜町が誕生しました。町名はその時に一般公募により名付けられました。

美浜町には地域の方々の誰もが自慢の「煙樹ヶ浜」「松林」があり、町民みんなの願いを込めた「美しい浜のある町 美浜町」と名付けられました。

町章の由来

「み」の字を以って波頭と鳥の雄飛するイメージを図案化。町の平和と^{ゆうわ}融和、^{あわ}団結と協力を表し、併せて産業・文化の^{せんぱく}飛躍発展を^{めいかい}単純明快に象徴しています。

町の紹介

「新時代のふるさと 美浜」～人がきらめき、緑かがやくまちをめざして～をキャッチフレーズに、次の6つの基本構想のもと、まちづくりに取り組んでいます。

1. 快適なまちづくり
2. ^{すこ}健やかでやすらぎのあるまちづくり
3. ^{ほぐ}育み、いきがいのあるまちづくり
4. 緑が映えるまちづくり
5. うるおい、活気のあるまちづくり
6. みのりあるまちづくり

日ノ御崎灯台の明かりが、はるか沖合いを^{せんぱく}通る船舶を導くように、常に現状を把握し、将来を見据えながら進んでいます。松林を地域の人たちが懸命に守り続けてきた^{きしつ}気質、100年以上も前に遠くカナダに大きな夢をもった^{しんしゆ}進取の気質、デンマーク人クヌッセン機関長の^{いでんしやう}遺徳を今も^{いとく}伝承している気質、これら住民の皆さんを取り巻く環境や想い、行動を大切に守りながら前進している町です。

主な産業の特産品としては、農業関係ではビニルハウスによるキュウリの^{そくせいさいばい}促成栽培、漁業関係では煙樹ヶ浜の^{じびきあみ}地曳網で採れる「シラス」がとて有名で人気があります。また、夏には煙樹ヶ浜にあるキャンプ場は家族連れで賑わいます。

ひだか 日高町



あき



あこう

HPアドレス <http://www.town.hidaka.wakayama.jp/>



熊野古道「石畳道」

町名の由来

1954（昭和29）年、内原村・志賀村・比井崎村の3村が合併し、日高地方の中心的存在になるようにとの願いをこめて命名しました。

町章の由来

日高町の頭文字ひだかの「ひ」を図案化したもので、円形は住民の融和と團結を表し、上部の翼は町の飛躍、発展を象徴しています。

町の紹介

町の北東部を縦貫する熊野古道には現存最長の石畳道と共に、その沿道には多くの旧跡があり、四季を通じて訪れる人も多くいます。また南西部には、風光明媚な海岸線がつながり、この地域の恵まれた自然環境を生かした温泉館「海の里」では、健康づくりとともに、うるおいとやすらぎの場を提供しています。

日高町の将来像を「人と自然が共生し、豊かでうるおいのあるまち“ホットタウン・ひだか”」と設定し、この将来像を達成するため、

- ①まちづくりの主体となる人づくりに努める
- ②一人ひとりの自立した生活を支える
- ③一人ひとりが安心できる環境づくりに努める
- ④一人ひとりの暮らしの基盤を整備する
- ⑤まちづくりを一体となって進めていく

以上5つを施策の基本におきまちづくりを進めています。

ゆら 由良町



すいせん



ましろしんばく
紀州横柏

HPアドレス <http://www.town.yura.wakayama.jp/>



白崎海岸

町名の由来

ユラの地名は、万葉集にも詠まれ、奈良朝以前にさかのぼります。その後、古代末には由良川沿いの地域が「由良荘」となり、白崎・衣奈両地区の「衣奈荘」とともに現町域を形成していました。近世に入って日高郡奉行支配下におかれてきましたが、1889（明治22）年の町村制実施にあたり「由良村」となりました。その後、1947（昭和22）年に「由良町」となり、1955年に由良町・白崎村・衣奈村が合併して現在の由良町となりました。

町章の由来

由良町のカタカナの「ユラ」を上下に配し、全体の円形は、町民の和と円満な発展を表し、横線は町民の一致協力と町躍進雄飛を表したものです。

町の紹介

由良町は、大小の入り江が点在するリアス式海岸が連なり、「日本の渚百選」に認定された風光明媚な白崎海岸が有名で、その半島部分に白崎海岸公園が設置されています。この公園は、クラブハウス内や周辺の海岸でのダイビングや、オートキャンプ、展望台などの施設があり、一日をゆったりとくつろぐことができ、リゾート施設として年中多くの人で賑わっています。

興国寺はかつて法燈派の大本山であり、春は桜で山が桃色に染まり、夏は緑深く、秋は紅葉に彩られます。県の無形民俗文化財に指定されている燈籠焼は全国的にも有名です。

そのほか、海釣り公園、戸津井鍾乳洞など見所は多く、休日の一日を思う存分楽しめます。

ひだかがわ 日高川町



HPアドレス <http://www.town.hidakagawa.lg.jp/>

町名の由来

日高川町は、2005（平成17）年5月1日に川辺町・中津村・美山村の3町村の合併によって誕生した町であり、古くから共通財産である清流「日高川」に育まれた美しい自然や文化、歴史等があるとともに地理的にイメージできる名称です。

町章の由来

外側の円は、日高の日と旧町村の和を表し、その中に緑の高い山並みと、青く澄んだ川の流れをもって、日高川町を表現しています。全体として、旧町村が丸く融和し、豊かな自然をアピールし、自然と共生する活力ある町の発展を願う町民の想いを表しています。

町の紹介

本町は、和歌山県のほぼ中央部、日高川の中流域に位置し、大阪市内から特急で約1時間半のところにあります。町の約9割は林野で占められ、東の山間部から西の平野部へと地形が変化し、四季の変化に富んだ風光明媚な景観を呈しています。産業としては、みかんを中心とした農業や紀州材として林業が盛んな地域で、紀州備長炭の生産量は日本一を誇ります。また、安珍・清姫伝説で有名な和歌山県下に現存する最古の寺「道成寺」をはじめ、文化財・歴史遺産や伝統が今でも数多く残されています。さらに年間を通して見所がたくさんあり、星空観察とプラネタリウム体験ができるかわべ天文公園、4月下旬から5月上旬に見頃を迎える長さ日本一のみやまの里藤棚ロード、5月下旬から6月中旬には町内各地でホタルの幻想的な乱舞がみられ、夏期には緑に抱かれた清流沿いでのキャンプ、晩秋の紅葉狩りなど、温泉施設も含め多くの地域資源があり、地域の活性化と都市間交流を目的とした各種イベントも開催しています。



かわべ天文台（天文台と1m望遠鏡）

いなみ 印南町



千両

イサキ（勇紀）

杉

HPアドレス <http://www.town.inami.wakayama.jp/>

町名の由来

町名の語源については明らかではありません。

宇奈辺の転語「宇と印」「辺と美」は通ずる語であり（「紀伊続風土記」印南荘）、また「海波の稲穂の波に似るによる」との伝承もあります。

町章の由来

この町章は I N A M I の頭文字「I」を図案化したものです。先端の高いところは山で林業、中央の空白は平野で農業、両端の切り込みは港で漁業を表しており、自然と人との調和のとれたゆるぎない印南町の前途を象徴したものです。

町の紹介

印南町は、和歌山県西部海岸のほぼ中央に位置し、8kmにわたる海岸線を基底に北東20km延びた地形をしています。北から東にかけては御坊市・日高川町・田辺市に、南東はみなべ町に境を接しています。

背後には緑豊かな紀伊山地が広がり、そこから流れる印南川と切目川が流域の田畑を潤しながら太平洋に注ぎます。温暖な気候と地形を活かし、多彩な農作物が生産されています。1年を通じて旬の野菜や果物、みずみずしい花が絶えることがありません。

また、毎年10月2日に行われる印南祭りは、県無形文化財の「重箱獅子」や、御輿と屋台が印南川を渡る「お渡り」などがあり、京阪神からの見物客も多い大変勇壮な祭りです。

近年、京阪神と町を直結する高速道路が開通しました。海も山もある豊かな自然を守りながら、産業の振興と住民生活の向上を図ります。



印南祭

みなべ町



梅



ウグイス



ウバメガシ

HPアドレス <http://www.town.minabe.lg.jp/>

町名の由来

「みなべ」は古くは、御名部、三名部、三鍋などと書かれていて、万葉集には「三名部の浦」と出ています。「南部」の名称は、奈良時代734年の木簡に「紀伊国日高郡南部郷」の文字が見られ、また1175年の高野山文書には紀伊国の「南部荘」という名称が見られることから、長い歴史の中で継承されてきた名称です。

南部町と南部川村が合併する際、新町の名称に関する住民アンケートの集計結果で「みなべ町」が35.4%と最多であり、漢字の「南部」からひらがなの「みなべ」にすることにより新しい名前となり、新たなスタートがきれると、「みなべ町」になりました。「みなべ」の名称は、わかりやすく、使いやすく、優しい印象を与えます。

町章の由

全国から応募のあった1,998点の中から、合併協議会（平成16年5月31日）で投票により決定しました。清冽な水と緑をみなべ町名産の梅花のフォルムにあしらい、カラーは山のグリーン、海川のブルーを表しています。

町の紹介

2004（平成16）年10月1日、南部町と南部川村が合併して誕生したみなべ町は、県中央部に位置し、黒潮の海に面した気候温暖な町で、日本一の梅の産地です。役場には全国で唯一のうめ課が設置され、梅の消費宣伝を担当しています。またウバメガシなどを原木とする当地特産の「紀州備長炭」も多く生産され全国に出荷されています。

海岸線は田辺南部海岸県立自然公園に指定されており、梅林や鹿島などの景勝地のほか、世界遺産でもある熊野古道が町内を通り、熊野九十九王子社の一つである岩代王子社、千里王子社、三鍋王子社などがあり文化遺産にも恵まれています。

また、熊野古道のコースの中で唯一海沿いである千里の浜には毎年多くのアカウミガメが産卵に上陸しており、その産卵頭数は本州一となっています。

早春には観梅、夏には海水浴、磯釣り、観光の魅力もいっぱいです。



梅の花

しらほま 白浜町



はまゆう



しらさぎ



さくら

HPアドレス <http://www.town.shirahama.wakayama.jp/>

町名の由来

昭和のはじめ、大阪商船（会社）が、関西で瀬戸鉛山村を「白浜」の名前で宣伝していたこともあり、1940（昭和15年）3月1日に旧村名にこだわらない新しい名前「白浜町」と決定しました。また、2006（平成18）年3月1日に白浜町と日置川町が合併した際にも、十分検討して「白浜町」という名前に決まりました。

町章の由来

白浜町の頭文字を図案化。三角形は町の限りない発展を、中心の円形は太陽を、外の円形は和を表現しています。今後も勢いよく発展する町の姿を象徴したものです。

町の紹介

町域には田辺南部海岸県立自然公園、熊野枯木灘県立自然公園、大塔日置川県立自然公園が含まれます。また、東西に富田川、日置川が流れ、本流とそれらに注ぐ大小16の支流には豊富な水と多様な生物が生息しています。海・山・川の豊かな自然に恵まれた町です。

白浜の歴史は古く、多くの名勝や遺産があります。白浜温泉は、飛鳥、奈良時代から天皇や貴族をはじめとした多くの人々が来泉し、「牟婁の湯」「紀の湯」の名で知られた三古湯のひとつです。また、世界遺産に指定された熊野古道があり、その歴史と関わりの深い絵画や仏像などの文化遺産が多く保存されています。日置川河口には中世の歴史の表舞台にも登場する安宅水軍の本拠地があり、その城跡は現在も調査されています。近世では菱垣廻船を中心とする海上交通の中継点としても栄えてきました。

現在は人口が約2万4千人（平成20年）。年間約330万人（平成19年）の観光客が訪れ、豊かな自然と歴史を生かした観光に関わる産業が盛んです。富田平野や日置川流域では水稲、野菜、花卉、果樹栽培が行われています。

白浜町は、「輝きとやすらぎと交流のまち 白浜～住んでよい、訪れて楽しいふれあいのまちづくり～」を町のテーマとして、住民一人ひとりが日々の生活を快適に、健康で安心して暮らせる環境づくりを進めています。



円月島

かみとんだ 上富田町



さくら



やまもも

HPアドレス <http://>

紀州口熊野マラソン

町名の由来

町内の中央部を富田川が流れています。川は延長40.5km、流域面積247km²で中下流域は平地が多くなっています。

古くは、岩田川と言われていましたが、中世、この地を支配した山本氏が治山治水に力を入れ、河川改修したことで、文字通り、「富田」と呼ばれる穀倉地帯になりました。

1958（昭和33）年、富田川町と上富田町が合併して上富田町となりました。

町章の由来

上富田町の「上」に「と」の文字を組み合わせたもので、「円」は町の調和と団結、「両翼」は町の飛躍と発展をあらわしています。

町の紹介

上富田町は富田川の中流域に位置し、早くから農耕が発達したらしく、弥生時代の遺跡が多くあります。注目される遺跡として、一ノ瀬遺跡があり、また、岩崎地区から銅鐸が出土しています。

平安末期から鎌倉中期にかけて、上皇や貴族・庶民が熊野三山に参詣しました。その道すじは、富田（岩田）川沿いを東へのぼるものであり、この中辺路街道には、西行法師の歌で有名な八上王子があり、稲葉根王子、岩田川を渡って一の瀬王子、さらに東には鮎川王子がありました。

他に、中世、この流域の支配者であった山本氏関係の遺跡等もあります。神社仏閣、遺跡等の保存が進み、地域の人たちの見学に、或いは児童生徒の教材になっています。

産業面では、水田に米を作る人、都市近郊の野菜作りにせいを出す人がいて、新鮮な農作物を地域に提供しています。丘陵地では、古くから温暖な気候を利用して温州みかんの栽培や梅栽培が行われていて、梅を加工し、販売する農家もあります。

すさみ町



はまゆう



めじろ



しい

HPアドレス <http://www.town.susami.lg.jp/>

スキューバダイビング

町名の由来

すさみ町の沿岸は黒潮の流れが速く、南～西寄りの風が強く吹き付けるため、動力船ができるまでは航海の難所でした。こうした「荒（すさ）ぶ海」が時を経て「周参見（すさみ）」に転じたといわれ、1955（昭和30）年の町村編入合併によりひらがなの「すさみ」町となりました。

町章の由来

すさみ町建設の理想である平和、協調、躍進を象徴しています。全国からの273点の図案応募より当選した本町章は、全体の形は「す」の字、4つ角は編入合併した4町村の協調、円形は平和、すは大鳥、千里の外に向かって跳躍せんとする印象が強いものです。

町の紹介

すさみ町は、深緑の山々と清らかな川や海に囲まれた自然豊かな町です。町内の人口が約5,000人で、人数の半数が65歳以上の集落となる地域が多く、高齢化が進んでいます。

自然環境を活かした農林水産業と観光が地域経済の支えになっています。海中ポストで知られるスキューバダイビングや、イノブタダービーなどの地域のイベントも開かれています。

地域における高齢化が進むなかで、地域密着型の医療制度の実施、福祉事業の充実、教育の振興に積極的に取り組み、町民一人一人が明るく、快適に暮らせる町づくりを推進しています。

なちかつうら 那智勝浦町



つつじ



かし

HPアドレス <http://www.town.nachikatsuura.wakayama.jp/>

町名の由来

1955年（昭和30）年に勝浦町・那智町・宇久井村・色川村が合併し、那智勝浦町が誕生しました。その後、1960（昭和35）年に太田村と下里町を編入し、現在の町域になりました。「那智」は「那智荘」というこの地の中世の荘園名が由来したもので、「勝浦」は勝浦湾に植物の葛の蔓のように突き出た半島を「迦都宇良（かつうら）」と言われ、それが由来したものとされており。

町章の由来

町の平和と団結を表す円形に日本一の滝である那智の滝を簡潔に表したものを中央に配したもので、色彩の青色は熊野灘の海の色を表しています。（このデザインは、一般公募され1964（昭和39）年10月1日に制定。）

町の紹介

那智勝浦町は、南紀熊野観光の中心地として賑わい、日本一の生鮮マグロの水揚げで有名な勝浦漁港や、県内一の源泉数を有する温泉、日本一短い二級河川として認定されたぶつづつ川（13.5m）、世界遺産に登録された日本一の那智の滝（高さ133m）、熊野那智大社、那智山青岸渡寺など、豊かな自然と歴史、そして温泉リゾートの町です。

那智勝浦町では、豊かな自然や環境、歴史的文化遺産を大切に守り、それらの恵みと地域の個性を活かした産業を育成し、人々にやすらぎと活力を与え、文化の香り高いまちづくりをめざしています。さらに「豊かさやさしさが溢れる那智勝浦町」の実現を図ることを将来像とし、次の5項目を基本方針としています。

- ①快適で安心して暮らせるまちづくり
- ②地域の個性を活かした活力のあるまちづくり
- ③健やかでやさしいまちづくり
- ④人間性をはぐくむまちづくり
- ⑤町民と行政がともに歩むまちづくり



那智ノ滝

たいじ 太地町



浜木綿



いそひよどり



浜せんだん

HPアドレス <http://www.town.taiji.wakayama.jp/>

町名の由来

太地という名の由来は不明。

町章の由来

太地町の「T」を図案化し、伝統の鯨を象徴し、円は町民の和を表徴し、▼は町の躍進をあらわし、色は緑で国立公園地帯を意味します。

町の紹介

総面積5.96km²と県下でも一番小さな町ですが、三方を海で囲まれており、黒潮の影響で温暖であり、町を取り囲む海岸は勇壮明媚を誇っています。

また、太地は古くから古式捕鯨の発祥地として全国的にも知られており、これらの特色を生かして「くじらの博物館」や「水族館」を中心に観光の町を目指しています。

地域の特長を生かした特色ある町づくりを目指し、環境に配慮した町づくり、健康で幸せな町づくりなど、多様化する町民の期待にこたえられる町づくりを目指すとともに、都市型観光開発の形態をとらず、町全域を人々の心を和ませるリゾート地とし、さらに観光立町を目指します。



梶取埼灯台

くしもと
串本町

すいせん



めじろ



きんかん

HPアドレス <http://www.town.kushimoto.wakayama.jp/>

町名の由来

本土と潮岬をくし刺しにしたような地形であるため、といわれています。

町章の由来

「串」の字をモチーフに、緑で陸地、青で大海原、オレンジで人の力を表現し、それらの組み合わせによって人と自然が生み出す力、未来へと向かって伸び行く姿を表現しています。

町の紹介

串本町は、紀伊山地を背に潮岬が雄大な太平洋に突き出した本州最南端の町です。

2005（平成17）年4月1日、旧串本町・旧古座町が合併し、「新生・串本町」になりました。

11月には、沿岸海域が世界最北限のサンゴ群落として「ラムサール条約」に登録され、八丁トンボの生息地である「田原湿地」は、環境省の「日本の湿地500」にも選ばれるなど、多くの自然に恵まれています。

水産業は、回遊魚や伊勢エビ・アワビ・サザエなどの水揚げも多く、古くはハマチの養殖が盛んで、近年ではマグロの養殖にも成功しました。果樹・花卉栽培などを中心とした農業や、良質のスギ・ヒノキなどを生産する林業・新鮮な海の幸を使用した加工製造業、観光と農林水産業の連携による体験型観光の充実も図っています。

なお、大島と本土を結ぶ「くしもと大橋」が1999年9月に完成し、エルトゥール号で有名な「トルコ記念館」や「日米友好記念館」等の国際交流を物語る建造物及び、我が国最古の石造り灯台「檜野崎灯台」がぐっと身近になりました。

このように、先人が残してくれた自然・歴史・文化の保護を図りながら、人と自然が共生できるやさしい町づくりに取り組んでいます。



くしもと大橋

こざがわ
古座川町

やまざくら



うぐいす



すぎ

HPアドレス <http://www.town.kozagawa.wakayama.jp/>

町名の由来

古座川には、奇岩巨岩が多く分布しており、古くから岩壁を神々の座「神座」とした。

それにより「神座川」となり「古座川」となったと考えられています。

町章の由来

古座川中央の「古」はますます雄飛する姿を表現したもので、末広の形で示しています。三本線は清流古座川を表したものです。

町の紹介

古座川は豊富な水量と水質のよさにおいて日本有数の清流であり、とりわけ小川流域の透明感はずばらしいものです。また、川沿いには奇岩名峰が並ぶ雄大な風景を見せ、訪れる人々に感動と心の豊かさを与えています。

近年、カヌーや観光火振り漁など地域の資源を生かした体験型レクリエーション地として、自然を求める人々や家族連れ客などが増えています。

町を代表する特産物である柚子製品は、「古座川ブランド」の旗手として注目されています。また、山間の気候や日照条件を利用して栽培されるシキミや千両など、地域性を生かした産業づくりを目指しています。

「清流に元気あふれるまち“古座川”」をキャッチフレーズに、町民の声を聞くことから始まるまちづくり、交流が育むまちづくりを進めています。



一枚岩



しゃくなげ



じゃばら

HPアドレス <http://www.vill.kitayama.wakayama.jp/>

村名の由来

この地域が紀州領であったころより北山とよばれており、1889（明治22）年の町村制により近郷5か村が合併して北山村が誕生しました。

村章の由来

「北」の文字を図案化して「山」形を構成し、村民相互の協力と栄光を表現しました。

村の紹介

村史は縄文時代に遡ります。彼等は豊かな土地を求めて移り住みました。熊野川上流でここ北山だけに縄文遺跡があることを思えば自然の豊かさがしのべれます。四季折々に彩られる自然が美しい北山村は総面積98%を占める深い森林と、清流北山川が、様々な生き物を育ててきました。その豊かな自然は今なおそのままに残されており、都会にはない、辺境のリゾート地となり自然に憧れる多くの観光客で賑わっています。北山村は周辺を三重・奈良両県に囲まれ和歌山県のどの市町村とも隣接しない日本で唯一の飛地の村で、又、奥瀨峡の激流でスリルを楽しむ日本で唯一の観光筏下りや、幻の果樹であるじゃばら（柑橘類）を栽培する唯一の村で活気に溢れています。

北山村は、山や川の自然の豊かな村です。その自然を生かし活気ある村づくりを目指し次の取組をしています。

- ①農林業の振興、特に「じゃばら産業」の育成と販路拡大。
- ②豊かな自然を生かした観光事業、「観光筏下りと伝統技術の伝承」「おくとり公園（総合グランド・オートキャンプ場・テニスコート・バンガロー等）」「おくとり温泉」等。
- ③北山村からの情報発信（ホームページ・村ぶろ・じゃばら直販サイト）等。
- ④道路整備の推進、道路整備を促進し、京阪神との人と物の交流。
- ⑤「若者定住政策」により元気のある村づくりを目指すと共に高齢化社会で安心して暮らせる福祉行政を推進。
- ⑥小中連携教育を進め、更に英語を通じた国際理解教育を強化して、将来の社会変化に対応し、豊かに生きる事のできる人材育成。



観光筏下り